緩急

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緩急

【Ｎコード】
Ｎ０２８３Ｚ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
剛速球投手土門は急に思うように勝てなくなってきた。その彼に対して新任のコーチ池端が言ったこととは。鈴木啓示投手と西本幸雄監督のやり取りをもとにして書かせてもらった作品です。

第一章

緩急

彼、土門清和の武器は何かというと。剛速球だった。
それこそ百五十キロを超える剛速球は。そうそう打てるものではなかった。
入団して早々二桁勝利を収め二年目以降も活躍を続けてきている。
若くして球界を代表するエースと謳われる様になっていた。
その剛速球の前に敵はないと思われていた。しかしだ。
七年目になった辺りでだ。次第にだ。
時々打たれるようになっていた。奪三振の数も減ってきた。
そのことに自分で気付いてだ。妙だと思いはじめていた。
練習でも試合でも投げていてもだ。しかしだった。
剛速球は衰えていない。球速も球威もだ。
受けるキャッチャーにだ。こう尋ねた。
「どうだ？俺のストレート」
「いつも通りですよ」
そのキャッチャーはこう答えた。キャッチャーは彼より若い。
その彼がだ。こう言うのである。
「スピードがンもですね」
「何キロだった？」
「百五十三キロです」
見事な速さだ。文句のないまでに。
「それに凄いノビでボールも重くて」
「特に悪くないな」
「はい、全然です」
いいというのだ。彼のボールはだ。
「それでもですね」
「ああ、どうもな」

「昨年辺りから勝利数とか三振の数とかが」
「減ってるからな」
「ストレートが衰えた訳じゃないですね」
「変化球もな」
彼とてストレートだけではないのだ。
「スライダーもシュートもな」
「いい感じですよ」
「コントロールはどうだ？」
「はい、それも」
問題ないとだ。キャッチャーは答える。
「全然大丈夫ですよ」
「じゃあどうしてなんだ？」
「わからないですね」
「ストレートもよくて」
彼の最大の武器はだ。とにかく問題なかった。
だがそれでもなのだった。今の彼は。
「思うように勝てなくなったのは」
「どうしてでしょうか」
彼のボールを受けるキャッチャーにもわからないことだった。だがわからないでは済ませられないことでありだ。彼は悩むのだった。
「どうすればいいんだ」
土門にとってはだ。より勝ちたく三振を取りたかった。これはピッチャーの本能だ。しかしそれが思うようにならなくなった原因すらわからずだった。
彼はこのシーズンも思うように勝てなかった。かろうじて二桁勝ったがそれだけだった。防御率も悪くなっており困っていた。
その彼の前にだ。シーズンが終わった直後にだ。
ある人物がその前に現れた。彼は。
「池端十四郎っていうと」
「ええ、あの人です」

相方のキャッチャーが彼に話す。
「名ストッパーだった」
「そうだったよな。あの人が投手コーチになったんだな」
「現役時代は多彩な変化球を武器にした技巧派でしたけど」
「俺とは正反対だな」
ストレートを武器にするだ。彼とはまさにそうだった。
それが自分でもわかっていた。それでだった。
彼はだ。こうも言った。
「あまりいいアドバイスは得られそうもないな」
「池端さんからはですか」
「結局今年もな」
調子は悪くないのにだ。それでもだ。
「思うように勝ててないしな」
「三振も防御率も」
「困ったことだよ」
「それでその困ったことを解決するような」
「ことが起これればいいんだけれどな」
その池端には期待せずにだ。こうぼやくのだった。しかしだった。
秋のキャンプでいきなりだ。彼は。
ブルペンで投球練習をしていると。その池端にだ。
声をかけられてだ。こう言われたのである。
「調子はいいな」
「ええ、ですが」
「思うように勝ててないな」
池端もだ。こう言うのだった。

第二章

「それだな。問題は」
「どうすればいいですかね」
「速球だけじゃ駄目だからな」
技巧派で鳴らした池端らしい言葉だった。
「それだけじゃな」
「変化球も投げてますよ」
「スライダーとシュートだな」
「はい、投げてますよ」
そうだというのだ。彼の武器はそれもなのだ。
だがその二つの変化球についてもだ。池端は指摘した。
「速いな」
「速い？」
「ああ、御前のスライダーとシュートはな」
その二つの変化球はだ。どうかというと。
「速いんだよ」
「速いっていうんですか」
「御前のスライダーとシュートは普通じゃない」
それならばだ。どういったものかというと。
「高速スライダーと高速シュートなんだ」
「高速のそれなんですね」
「つまりだ。御前はストレートも変化球も速いんだ」
そうだというのだ。彼のボールはどれもだ。
「それなら相手もな。ボールに慣れてな」
「打たれるんですね」
「相手もプロだ。どんなボールでも慣れれば打ってくる」
どんな速さでもそうなるというのだ。
「だからここ二年程結構打たれてるんだ」

「そうだったんですか」
「そうだ。だからな」
「だから？」
「速いボールだけじゃなくてな」
どうかというのだ。他にだ。
「緩いボールも投げろ」
「緩いボールって」
そう言われてだ。土門は。
思わずきょとんとした顔になってだ。こう言い返すのだった。
「あの、そんなことで」
「スローボールは嫌いか？」
「そんなボール通用するんですか？」
こうだ。彼は言うのだった。
「そんなの投げても」
「信じられないか」
「はい」
その通りだとだ。土門は素直に答えた。
「やっぱり速いボールじゃないと駄目ですよね」
「だからそれで打たれてきてるだろ？」
池端はまたこのことを指摘した。
「そうじゃないんだよ」
「ですが」
「まあな。実際に見ないと信じられないだろ」
「じゃあ見せてくれるんですか」
「そうだ。ちょっと場所変えるぞ」
ここで池端はこう言ってきた。
「いいな」
「それで何処に」
「そうしたことがわかる場所だよ」
そこだと話してだ。それでだった。

二人が来たのはだ。マウンド、そしてバッターボックスだった。土門はヘルメットを被りバットを持ちだ。バッターボックスに入った。

そのうえでだ。マウンドにいる池端に尋ねるのだった。

「ここですか」

「そうだ、ここでな」

「わかるんですか」

「御前バッティングできたな」

「ええ、まあ」

そうだとだ。土門はマウンドからの池端の問いに答えた。彼は右のバッターボックスにいる。右投げ右打ちなのだ。それに対して池端はサウスポーだ。

「好きですし」

「なら余計にいい。よくわかるからな」

これからだ。彼が教えることがだというのだ。

「じゃあいいな」

「コーチが投げるボールをですか」

「打ってみろ」

実際にそうしろと。池端は土門に告げた。

「いいな。そうしろ」

「わかりました。じゃあこれから」

「いくぞ」

池端はセットポジションからサイドスローで投げた。まずはストレートを。

第三章

土門はそれは打った。しかし三塁側へのファールだった。
コントロールは巧みだった。内角の隅に入る。これでは打つのは難しい。
それからも二球程ストレートが来た。一球はストライクで一球はボールだった。カウントはツーストライクワンボールだ。
そうなってからだ。池端は。
そのボールを投げた。それにはだった。
土門は思わず体勢を崩してだった。
かろうじてバットに当てたがそれまでだった。あえなくだ。
転々と転がったボールを池端に取られてしまった。つまりは。
「ピッチャーゴロだな」
「はい」
「俺の勝ちだな」
少し勝ち誇った顔になってだ。池端は言った。
「こういうことだよ」
「まさか。こうなるとは」
「思わなかったな」
「信じられないです」
「だがこれが事実だ」
今度は引き締まった顔になって話す池端だった。
そのうえでだ。土門に対してまた言った。
「わかったな。それならな」
「はい」
「御前にこのボールを授けるからな」
「そうしてですね」
「今まで以上に勝て」
そうしろというのだ。

「いいな。三振も防御率もな」
「これまで以上にですね」
「そうなれ」
こう話してだった。そのうえでだ。
土門は池端にそのボールを教えられたのだ。そうしてペナントに挑んだ。
最初の先発の試合は開幕戦だった。彼は何とか開幕投手に選ばれたのだ。
七回までは好投で一失点に抑えた。チームは三点取っていた。
三対一、試合は有利に進んでいた。しかし八回にだ。
彼は打ち込まれ二塁と三塁にランナーがいた。ツーアウト二塁三塁だ。一打出れば同点、ホームランが出れば逆転だった。
その状況でバッターは相手チームの主砲だった。まさに正念場だった。
その彼を見てだ。土門はだ。
まずは速球を投げた。それは微かにボールになった。
相手もそれは見送る。ボールは二球続いた。
そして次はだ。ギリギリストライクになる高速シュート、これは見送られた。

第四章

「こんなの打ってもな」
相手はわかっていた。その高速シュートは。
「ファールか。下手したらゴロだ」
それで終わるとわかっていたからだ。打たなかったのだ。
次は高速スライダーだった。ボールになる。
だがこれも見送る。今度もあえてだった。
五球目も高速スライダー、六球目は高速シュート。この二球はカットした。
そのうえでだ。土門に次のボールを投げさせるのだった。
七球目だ。ツーストライクスリーボールだ。この状況ではだ。
「勝負に出るしかないな」
ボールになれば四球で満塁になる。状況はさらに悪くなる。
ストライクを投げるしかない、だが既に高速スライダーも高速シュートも相手にしないところを見せている。そうなってはだった。
「ストレートだ」
土門の決め球であるストレートしかない、相手はそれを確信していた。
そしてそのストレートをだ。打つつもりだったのだ。
そのうえで待っていた。七球目を。
彼はストレートが来ると確信していた。間違いなくだ。
そしてそれを打ち勝負を決めるつもりだった。心の中でそれを狙い身構える。
「来い」
心の中でこう言ってだった。その七球目を待った。
土門の右腕が動いた。オーバースローから投げられる。
来るのはストライクになるストレート、そう確信してだ。
打とうとした。しかしだった。

来たボールは。何と。
「なっ！？」
それは緩やかにだ。相手から見て右斜め下に落ちる、そんなボールだった。
ゆっくりとしている。大きく曲がるそのボールは。
スローカーブだった。そのボールを前にしてだ。
彼は身体を泳がせてしまい体勢を崩して。そうしてだった。
大きく空振りしてしまった。そのままホームベースの上に倒れる。
三振だった。
「嘘だろ、あいつがか」
何とか起き上がりながらだ。彼はマウンドの土門を見て言った。
「スローカーブなんて投げられたのか」
呆然としながら言うのだった。勝負ありだった。
この回のピンチを乗り切ってだ。土門は勝負を決めた。そうして見事勝利を勝ち取ったのだ。
この試合だけでなくだ。彼はそのスローカーブも投げるようになりだ。昨年以上に勝利、そして三振を築いていった。そうしたのだ。
その彼に対してだ。池端は言った。
「どうだ、いい感じだろ」
「はい。何かこれまで以上に」
「好調だな。つまりはな」
「緩いボールもいいんですね」
「ああ。速いボールに緩いボール」
その二つがあると、とだ。池端は明るい笑顔で話す。
「凄い威力になるんだよ」
「ですね。それが」
「わかったな」
「はい。実際に投げてみて」
試合でだ。まさにそれで、だった。
「よくわかりました」

「ああ。じゃあこれからもな」
「投げます。緩いボールも」
具体的にはだ。スローカーブをだ。池端が教えてくれた。
「それで勝っていきますね」
「そうしろ。これからもな」
笑顔で応える池端だった。そうしてだった。
彼はあらたに緩いボールも覚え復活してだ。さらに勝っていった。
そうして遂には二百勝まで挙げた。二百勝した時にだった。
彼はだ。インタビューの時にこう記者達に話した。何故二百勝できたのか。
「池端さんに緩いボールを教えてもらったからです」
それによってそこまでいけたと話したのだ。満面の笑みと共に。

緩急　完

２０１１・７・２６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0283z/

緩急

2011年12月1日01時48分発行